

届け 世界の果てまでも

令和2年 9月 4日

No. 29

文責 校長 飯久保一男

ハンディキャップをもつ人と関わること



総合の学習で、福祉について考える授業をしたときのことです。子どもたちは障害をもった方と実際に関わりをもちたいという願いをもちました。その願いを実現すべく、市の社会福祉協議会にお願いをして、障害をおもちの方で、関わっていただけるという方を紹介してもらいました。あるグループは目の不自由な方と、あるグループは車いすで生活している方と関わらせていただきました。

目の不自由な方のお宅での生活の様子を知りたいという願いをもったグループには、Sさんを紹介してもらいました。お宅にお伺いする許しをいただき、私も一緒に訪問させていただきました。

Sさんのお宅へ伺うと、庭で洗濯物を干している方がいました。Sさんにお話を伺いに来ましたとお願いすると、その洗濯物を干していた方が「よく来てくれたね」と玄関に招いてくれました。居間に通していただき、飲み物やお茶菓子を出していただき、その方がちょこんと座りました。私が「Sさんはおいでですか？」と尋ねると、その方が「私がSです。」と言われました。「いえ、目の不自由なSさんにお話を伺いに来たのですが？」とさらに尋ねると「私がそのSです。目は全然見えていません。」と言われました。子どもたちも私もそこそビックリしました。洗濯物を干している姿、玄関に小走りに入っていく姿、お茶やお菓子を出してくれる姿を見て、目が不自由な方だとは全く思わなかったからです。

子どもたちが、あらかじめ用意してきた質問をしました。「目が不自由で何か困ることはありませんか？」この質問にSさんは、「何の不自由もありません。」とあっさり答えられました。加えて「私は畑もやりますし料理もします。家の敷地の中にいる限りは何の不自由もありません。」と言われました。ただ、敷地を出てどこかに行くとなると、一人では歩けないという話も付け加えられました。

私も驚きましたが、子どもたちの驚きはもっと大きかったようです。目の不自由な人に出会ったら「助けてあげる」とか「手を貸してあげる」などと優等生的（語弊があります）な考えをもっていた子たちでした。いわば、障害をもった人に対して、上から目線で考えていたのです。ところが、子どもたちは、Sさんと出会ったことで「目が不自由なのに、普通の人と同じ生活ができるすごい人」と尊敬のまなざしに変わったのでした。

別のグループが、車いすで生活をしているKさんのお宅に伺ったときにも、子どもたちは、同じ質問「何か不自由なことはありませんか？」をしました。これに対して「別に何の不自由もありません。」とKさんも同じ内容の答えでした。逆に「返って目立ってカッコイイでしょ。」と言われて、子どもたちは啞然としていました。買い物に行くと高いところのものが取れなくて困るという話も付け加えてくれましたが、それは身長の高い子どもたちも感じていることです。子どもたちは障害だとは考えませんでした。

車いすバスケットを観になったことはありますか？ かなり激しいスポーツです。激しく当たり合いますし、タイヤの焦げるにおいもします。





組立体操「サボテン」

教頭になる前の年は、6年担任をしていました。その学年には特別支援学級所属で、人と関わることが苦手なHくんがいました。5・6年生は例年、運動会で組立体操に取り組んでいました。その年の運動会の組立体操は、Hくんと私で2人組（肩車・サボテン・倒立）に挑戦したのです。3人組以上のワザには、Hくんでも参加できるのですが、2人組は1人が1人を持ち上げますので、組立体操ではネックなのです。Hくんは体が大きい方でしたので、2人組では下（土台）になる体型でした。試しに、学年でいちばん体重の軽い子を肩車させてみましたが、できそうもなかったため、私がHくんを持ち上げる役を買って出て、Hくんと2人組のワザに取り組みました。

その前の年は教務主任をしていましたので、その子どもたちが5年生のときは担任をしていません。5年生のときは組立体操に関わらず、Hくんが組立体操の一部を抜けて見学するような形になっていたのを歯がゆく思っていました。Hくんにも組立体操の全てのワザに参加させたいと思っていたので、そのチャンスが来たと思います。役を買って出たのです。人との付き合いが苦手なHくんでしたが、私とは割と普通に接してくれていたため、Hくんだけががんばればみんなと同じことができるんだと見せてやりたかったのです。

1学期から時間があればHくんと2人で練習しました。練習の様子は多くの子どもが見ていました。Hくんを励ます子も出てきて、うれしくなりました。中には、体重のあるHくんを持ち上げる私の腰を労わってくれるような心優しい子もいました。…そうなんです。2人組のワザは上になる側も協力してくれないと持ち上げるのが大変なのです。

運動会本番は、Hくんのがんばりと、もう少し若かった私の体力が合わさって、何とか2人組の演技を終えることができました。運動会終了後、学年全員の前で、この運動会で一番がんばったのはHくんかもしれないと話をする、子どもたちも納得してくれていました。

運動会以外の場面でも、私が担任した子どもたちは、Hくんと関わり、Hくんから多くのことを学んでいました。また、Hくんも他の子どもたちと交流することで多くのことが学べていました。

本校の学校教育目標「自分を大切に、他者を大切にする子どもの育成」を達成するために、自分やお互いのことを理解することはとても大切なことです。何らかのハンディキャップがある場合は「合理的配慮」が必要なきももあります。

本校の子どもたち全員が、まだまだ発達段階半ばの子どもたちです。お互いの個性や特性を理解し合い、認め合って交流し、成長していけるよう取り組んでいます。また、お互いがお互いから学び、配慮し合って、尊重し合って交流していけるよう指導・支援しています。

障害は不便である。

しかし、不幸ではない。

ヘレン・ケラー



有名なヘレン・ケラーですので、私の余計な注釈はいらないかと思いますが…。

ヘレン・ケラーは1歳で高熱に伴う髄膜炎より、一命は取りとめたものの、聴力と視力を失い、話すことさえできなくなりました。しつけもできない状態となり、非常にわがままに育ってしまいました。家庭教師として派遣されてきたアン・サリバンが「しつけ」「指文字」「言葉」を教え、ヘレンはあきらめかけていた「話すこと」ができるようになりました。サリバンはその後約50年に渡り、よき教師、そしてよき友人としてヘレンを支えました。

日本では「奇跡の人」というタイトルでサリバンとヘレンの話が紹介されています。